英國は何故にメソポタミアに執着するか

大川周明

一

メソポタミア問題は、戰後の英國中東政策に於て極めて重大なる地位を占めて居る。その何故に然るかを闡明するのが、本篇の目的である。

メソポタミアは、アナトリア高原より波斯灣頭に向つて、南々東に走れる一帶の狹長なる低地であつて、チグリス・ユーフラテス兩河の流域である。それは第一に中歐並に南歐より南亞細亞に至る最短距離の陸路なる點に於て、商業的並に政治的意義を有して居る。且メソポタミア自身が其の埋藏する豐富なる鑛產によつて、偉大なる經濟的價値を有する。鑛產の首位に在るは言ふ迄もなく石油であつて、波斯國境の山麓隨處に豐富なる油田を有し、またチグリス低地內にも、バグダートの東北にも、並にユーフラテス中流低地にも之を產する。それは所謂『波斯・メソポタミア油田地域』の西半を形成するもので、世界戰前既に英獨露三國の爭奪點であつた。

メソポタミアの南部及び中部に住する民族は主としてアラビア人、東北部に住するはクルド人である。アラビア人は沿河地方及び都會に居住するものを除けば、概ね遊牧を事とし、各部落の酋長によつて統御されて居る。世界戰前に於ては土耳古領であつたけれど、土耳古官吏は名目のみの支配者に過ぎなかつた。クルド人はアラビア人よりも慓悍な民族で、土耳古政府はメソポタミア地方を制御する爲に常にクルド軍隊を利用して居た。兩者ともに回教徒であるが前者はスンニ派に、後者はシア派に屬して居る。人口は總てを合せて戰前約百五十萬と算定されて居た。

二

一九一四年八月、英國の對獨宣戰によりて世界戰が本舞臺に入るや、十一月五日英土兩國の國交斷絕となつた。當初英國の中東政策は、第一には波斯灣頭の油田を確守し、第二には獨土同盟軍が双河地方を南下して埃及印度間の海路に側面進出を行ふの危險を阻止するに存し、此目的の爲に一隊の軍をバスラに派したが、要するに消極的態度を執つて居た。然るにバスラは早く既に優勢なる土耳古軍の爲に脅威する所となり、英國は援軍を續派せねばならなかつた。而して英國は一變して攻勢に出で、其の增援軍を以てバスラ縣全部を占領するに決し、七月末にはチグリス、ユーフラテス兩河に沿ひ、バスラを距を百哩の地帶に進出した。攻勢は更に續けられ、此年の秋にはチグリス河を遡りてクテラマラに達し、次で一擧してバグダードを陷れんとしたが、此の計畫は見事に失敗して、所謂タウンシエンド軍の降服に終つた。

其後メソポミアに於ける英軍は、暫く鳴を鎭めて居たが、翌一九一六年十二月に至り、モード將軍の下に再び攻擊を開始し、一九一七年三月十一日、遂にバグダードを占領して、先づ最初の目的を遂げることが出來た。一九一八年には、マーシャル將軍の下に屢々土耳古軍を破り休戰當時までにチグリス河畔の土軍主力を捕虜とし、モスルを占領して居た。而してユーフラテス河畔ではアルグ・ケマルまで進出した。且一方土軍が東アナトリアより波斯を脅威

「道」第157号(1921.5)

せるに對抗するため。マーシャル將軍は一九一八年五月ケルマンシャー・エンゼリ通路に軍隊を派し、六月中旬にはレシト及びエンゼリをも占領した。

かくて英國は休戰以前に於て既にモスル縣、バグダード縣、バスラ縣を合せたる所謂メソポタミア全部約十八萬方哩の地を占領したのである。

三

英國は軍隊を以てメソポタミアを占領したが、其の統治は決して容易なるものでなかつた。土耳古國民主義者の排英宣傳、アラビア人の大亞刺比亞主義運動、全般に漲る宗教的反感、乃至戰爭のために生じたる經濟的變動が原因となつて、メソポタミアの形勢は紛糾せざるを得ない。且英國は財政的事情より到底大軍を永くメソポタミアに駐屯させることが出來ぬ。そは一九一八年十一月より一九二〇年六月に至る間に、メソポタミア駐屯軍を二十二萬より約九萬に減じ、アラビア人の地方的叛亂に對しても軍事的乃至政治的理由から從前の如く峻嚴なる政策を取り難くなつた。殊にユーフラテス河畔の頑强なるアラビア酋長ディレッゾルが、公然英國の統治を拒否し、而も英軍は之を鎮壓することなくして次第に該地方より撤退したるにかへて、トランス・カスピア及び高加索方面の英軍も亦撤退したるを以て、アラビア人は英軍を以て恐るゝに足らずとなし、漸く之を輕んずるに至つた。而して是くの如き思想は、昨夏英國守備隊が赤露軍の攻擊によりてエンゼリ及びレシトを退いてから一層强くなつて來た。

かくてアラビア人は、言ふに足らざる軍隊を以て後援とせる新來の征服者によつて支配されて居ると考へ初めた。彼等は自ら能く此の羈絆を脱し得べきを信じ、唯だ機會の到來を待つ。昨年七月にはユーフラテス河畔の一都會ルメイタに叛亂が起つた。而して之を放置したが爲に、七月末には各地に同樣の

暴動が一齊に起つたのである。

四

此等の暴動は幸に大事に至らなかつたが、今後英國が國際聯盟によつて委任せられたる此地方全體を立派に統治して行くことは、如何なる點から考へても非常なる難事である。第一にメソポタミアは十八萬方哩に亘る地域であつて、朝鮮を除ける日本の面積よりも大きい。次には交通機關が兩河沿岸の外は殆どない。最彼にアラビア人は日に排英的精神を强めて來る。而も最も有効なる統治に必要なる大軍は、英國戰後財政の到底其の經費を負擔し得る所でない。故に英國内に於て、如何にしてメソポタミア統治の實を擧げて、最大なる利益を此より收む可きかゝ政治家の頭を惱ます問題とならざるを得ぬ。

之に對して或はバスラ縣だけを確實に英國のものとせよと唱へる者がある。或はバグダート以北に手を出すなと唱へる者もある。或は土耳古政府の故智に倣ひ、クルド人を懷柔してアラビア人に當らしめよと唱へる者もある。而して多數の新聞は英國政府はメソポタミア問題の解決を誤まつた、從つて解決し難きものとしたと嘆いて居る。そんなに厄介ならば、戰時の占領は別問題として、戰後に躍起となつて委任統治を引受け、佛蘭西と激しく反目嫉視するにも及ばぬ筈であるが、英吉利は如何に厄介でも之を自國の勢力範圍に置かねばならぬ理由がある。

五

英國は先づメソポタミアの石油を必要とする。列國は世界戰の經驗によつて、重油、揮發油、機械油として石油の必要を痛感した。英國の例に見るも、一九一三年の消費額は約四億八千八百萬ガロンであつたが、一九一九年には實に六億七千萬ガロンに達した。故に各國は今や汲々として或は石油脈の探査

に苦心し、油田の爭奪に熱中しつゝある。然るにメソポタミアは、既に述べたる如く、極めて豐富なる油田がある。

メソポタミア油田は、一九〇五年『獨逸銀行』によつて派遣せる探檢隊の報告が、其の價値を力說せるに拘らず、未だ列國に大なる刺戟を與へなかつたが、英國の波斯に於ける石油會社が偉大なる成功を收むるに及んで、初めて世界の注意を喚起し、メソポタミア油田が、其の廣さに於て、其の產額に於て並に其の品質に於て、他國より出だす石油の最優等品を角逐し得るを知るに至つた。蓋し波斯メソポタミアの境上に在る石油地帶は、延長實に二千吉米突に及び、地球上他に比類を見ざるもの。そのうち千七百吉米突は波斯に、三百吉米突はメソポタミアに屬する。英國は如何にしても之を自己の掌裡に收めねばならぬ。而も石油を熱望するは獨り英國のみではない。かくてサン・レモ會議に於て締結せられたる有名なる英佛石油協定に於て、英國は佛蘭西にもメソポタミアの石油を分配することを約した。即ち英國が政府事業としてメソポタミア油田を開發する時には、原油產額の二割五分を佛國に時價を以て讓渡すること、若し英國私立會社が開發する時は、英國政府は該會社百分二十五の持分を佛國の支配下に置くことを定めたのである。

次にメソポタミアは、世界に於ける最も有望なる棉花生產たる可き條件を具備して居る。近年世界に於ける棉花の缺乏は甚しく、而も需要は益々增進するを以て供給之に伴はぬ。故に英國の如きは殊に棉花の不足を感じ、其の大規模なる紡績業は、戰前既に短縮するの止むなきに至つた。然るにメソポタミアは、現在に於て灌漑宜しきを得ざるが爲に荒廢に歸して居るけれども、適當なる工事を施せば、豐富なる豐產を獲得し得べきことは、ウイルコックスの實地踏查によりて明白に證明されて居る。彼れの發表によれば、双河の低地は約二千萬ポンドの經費を投じて百四十萬ヘクタールの耕地を得べく、之よりして毎年百五十萬噸の穀類と百萬包の棉花とを得べしとのことである。故に英國は自國紡績會社のために豐富なる棉花原料を供給すべく、世界戰開始以來意をメソポタミアの永久領有に注いで來たのだ。

最後にメソポタミアは、軍事的に印度保全のために必要である。若し此地が他國の領有に歸する時は明白に印度の脅威となる。加ふるに赤露の南下に對して、英國が之を阻止せんとせば、必ずメソポタミアを根據とせねばならぬ。

此等の諸理由が英國をしてメソポタミアに執着せしむる所以であり、且メソポタミア問題が重大なる意義を有する所以である。

感謝の生活

飯塚正一

古來日本民族は活動主義をとつて來た。生々止まざる發展を期する國民であつた。七たび生れて國難に當らんとする氣慨があつた。神勅を奉じて危難の身に迫らんとするを恐るゝ暇がなかつた。吾に七難八苦を與へよと祈つた程の意氣があつた。然るに今や世を擧げて名利に走り、自己の利害休戚のためには汲々としてなす所を知らぬ有樣であるが、苟も世道人心のため社會國家のために精神的努力をなさんとするもの、甚だ稀なるは實に歎ずべき事象である。

吾等は幸に健全にして、日々を天職のために樂し